論　文

高橋和巳の文学にみる人間主義
――「文学講座」と「人間にとって」を中心に――

田　中　　寛（大東文化大学名誉教授）

The Humanism in the Literature of KAZUMI TAKAHASHI:
Centering of “BUNGAKU-KOHZA” and “NINGEN NI-TOTTE”

Hiroshi TANAKA

要約

大江健三郎、三島由紀夫と共に一九六〇年代を代表する文学者、作家高橋和巳（1931-1971）は中国文学研究者でもあり、六朝文学論から人間の無常観を学ぶと同時に、戦後文学の批判的継承者として多くの長篇小説、評論、研究、翻訳という全体知的活動を展開した。本稿では高橋和巳の文学観の本質に迫るべく、彼の人間主義について初期の二回にわたる連続講演・講義、晩年のエッセイを通して再考した。出発点となった「葛藤的人間の哲学」から一貫した「自己否定」に至る過程には夏目漱石の「自己本位」に重なる「自己浄化」と「自立化」という人間性回復への志向性が見られる点を改めて検証した。

【キーワード】　高橋和巳　人間主義　自己否定　自己浄化　自立化

1．はじめに――未完の追想

これまで高橋和巳（1931-1971）の著作についてはいくつかの選集、全集、コレクションが刊行されている。年代順に整理すると次のようである。

(1)『高橋和巳作品集』全9巻別巻1　河出書房新社　一九六九―一九七二
(2)『高橋和巳全小説』全10冊　河出書房新社　一九七五―一九七六
(3)『高橋和巳全集』全20巻　河出書房新社　一九七七―一九八〇
(4)『高橋和巳短篇小説集』全1巻　阿部出版　一九九一
(5)『高橋和巳コレクション』全10冊　河出書房新社　一九九六
(6)『高橋和巳・高橋たか子電子全集』全12巻　小学館　二〇二一・八―

(1)は高橋和巳の生前から刊行が始まった作品集であるが、晩年の「白く塗りたる墓」、「黄昏の橋」は未収録。別巻は六朝詩人李商隠についての論攷『詩人の運命』で、竹内好の『魯迅』、武田泰淳の『司馬遷』の延長線上に、中国文人の精神性を自己確立論と重ねて論じたものであった。作品集に続いて補巻として埴谷雄高編『高橋和巳論』が刊行されている。(2)は没後5周年に刊行された全小説二段組の軽装版。解題は全巻を川西政明が担当した。(3)は没後10年を機に編まれた吉川幸次郎、埴谷雄高の監修による本格全集決定版。(4)は九編の短篇を編集したもので梅原猛の序と太田代志朗による解説をおさめた。『海燕』（一九九一年六月号）では秋山駿と埴谷雄高による対談「高橋和巳没後20年に因んで：格闘する文学」が掲載された。『文藝』（一九九一年季刊秋季特大号）では小特集「没後二〇年・高橋和巳再読」が編まれたが、三名の作家、評論家、研究者による論攷、「うるわしきタナトス」（久間十義）、「劇的なるものの憂鬱――高橋和巳『散華』再読」（紅野謙介）、「暗喩としての満洲国――高橋和巳『堕落』の構造」（藤井省三）が掲載されたのみであった。(5)は没後25周年記念・高橋和巳文庫として再編されたもので、埴谷雄高、川西政明の監修による。コレクションの名の通りエッセイ・評論、小説、中国文学論が収録された。初期習作、「堕落」、「散華」などは未収録。各巻解説者も従来の高橋和巳論者に加え女性作家を配するなど読者層を増やす試みがみられた。以後、選集、全集の改訂重版の企画もなく、文芸誌でも特集が編まれることはなかったが、二〇一六年あたりから新装版文庫本が河出書房新社から数冊刊行されている。(6)は没後50年を機に電子全集として高橋たか子の全集とともに刊行が始まっている。全巻を通して解説は太田代志朗。(3)に未収の著作、初出の生原稿、写真類も含まれている。

一方、一九九〇年代九〇年代から二〇〇〇年代にかけて新しい世代による新しい高橋和巳論が上梓された。(7)は小説、エッセイ・評論、中国文学論を全方位的に検証した労作。(8)は短篇を除く中長篇小説を再読した作品論。(9)も長篇を中心とする、気鋭の英文学者による比較文学論的省察も含めた研究書である。

(7)『孤立の憂愁を甘受す―高橋和巳論』脇坂充　社会評論社　一九九九
(8)『高橋和巳作品論　自己否定の思想』伊藤益　北樹出版　二〇〇二
(9)『高橋和巳　棄子の風景』橋本安央　試論社　二〇〇七

このようにかつては顕彰され続けた高橋和巳文学もとくに二〇〇〇年代に入ってからの注目度は激減し、今では大型の書店ですら彼の著作を探すことはほぼ不可能でさえある。そうした中、ここ数年、次のようなアンソロジー、研究論集、作家論が刊行されている。

(10)『高橋和巳　世界とたたかった文学』河出書房新社　二〇一七
(11)『桃の会論集八集　高橋和巳専号』桃の会（非売品）二〇一八
(12)『高橋和巳の文学と思想　その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』太田代志朗、田中寛、鈴木比佐雄編　コールサック社　二〇一八
(13)『高橋和巳論　宗教と文学の格闘的契り』清眞人　藤原書店　二〇二〇

(10)はもっぱら高橋和巳の作品のガイドブック的体裁で、若い世代による評論、対談などが収録された。(11)は高橋の中国文学論に焦点をあてた研究論文集。(12)はこれまで刊行された中でも最も本格的な研究論集で24名もの論客により光が当てられた。未発表草稿三点を含むと同時に詳細な参考文献目録のほか書誌研究、年譜も収録。(13)は主として哲学的な視角から高橋和巳の長篇小説を論じている。以上、没後の高橋和巳の研究史を瞥見、ないし概観した。決して少なくない研究史は高橋和巳の文学営為を検証してきたが、それでも彼の目指した文学の本質、〈棄子〉にしても「自己否定」にしても、そこに通底する人間高橋和巳の原質はなお未検証のままにあるように思われる。

2. 高橋和巳略伝再掲

高橋和巳は長篇、中短篇のほかに膨大な評論を書き残しているが、彼の文学概念、さらに人間論がどのように醸成されていったかは、作品論、作家論が大勢を占める中、必ずしも明らかにされてはいない。本論に入る前に高橋和巳の略歴を記しておこう。(1)

昭和六年八月三一日、高橋和巳は大阪市西成に生まれた。この年の九月一八日には満洲事変が勃発した。戦時下では中学時代に愛媛県に疎開して農村動員を体験している。この戦争体験は彼の文学に大きな影響を与えたことは言うまでもない。戦後は松江高校に在籍、駒田信二より漢文の手ほどきを受ける。新制の京都大学文学部中国文学科に入学、卒業後は大学院に進学、博士課程を修了する。専門は六朝美文論。少年期の戦争体験をもとに高校時代から埴谷雄高や野間宏など第一次戦後派の小説に傾倒、大学在籍時には小松左京らと同人雑誌を出し習作に励んだ。一九五八年に処女作『捨子物語』を足立書房から自費出版する。一九六二年、立命館大学文学部講師に就任、翌年に一人の刑法学者の破滅を通して、知識人の没落風景、人間の根本的悪を描写した『悲の器』によって河出書房文藝賞第一回長篇部門に当選し、一躍脚光を浴びる。続いて翌年には戦時下の精神主義を追求した「散華」を発表した。続いて戦後の青春の終焉をえがいた『憂鬱なる党派』、またある新興宗教の教団の盛衰を中心に昭和の精神史を描こうとした長篇「邪宗門」、『我が心は石にあらず』、『日本の悪霊』など、次々と長篇小説を発表した。また文学以外でも幅広い領域の評論家としても活躍した。知識人の苦悩を主題とした文学は夏目漱石の再来ともいわれたことがあり、また将来の大器と期待されていた。中国文学の研究者としても注目され、『李商隠』、『王士禎』の解説書、詩人の学術研究をものし、立命館大学から明治大学に移籍したが、一年で一九六七年に京都大学文学部助教授として着任、吉川幸次郎博士の後継者として期待された。その一方で、おりからの大学紛争のなかで学生側を支持するも心身ともに疲弊して辞職、その際の苦悩はエッセイ「わが解体」に吐露された。高橋和巳の文学の特色は、否定の精神にもとづきながら知識人の運命と責任、その倫理性を追究するところにあったが、三島由紀夫の自決から約半年後、結腸癌のため一九七一年五月三日、病没した。享年39歳。没後、さまざまな作家論、作品論が書かれたが、文学論を含め、その体系的集成はまだ途上にあるといえよう。研究、創作、批評、翻訳の全体知をもとめた文学の方法論についても再検証、再評価がもとめられるゆえんである。

3. 高橋和巳における文学観の形成

上述のように高橋和巳は一九六二年に『悲の器』の文藝賞受賞により文壇にデビューするや、十年にも満たない歳月のなかで多くの長篇小説を書き残したが、このほかにも膨大な評論、エッセイ、翻訳、研究著作がある。創作よりもむしろ評論における営為を高く評価する向きもある。高

橋の評論活動は創作と並行して進められたが、年代順にあげれば次のような流れになる。まさしく創作と両輪の関係で書かれた観がある。とりわけ⑭、⑮は高橋和巳の創作の原点を検証する意味でも重要である。

⑭『文学の責任』河出書房新社　一九六二
⑮『孤立無援の思想』河出書房新社　一九六六
⑯『新しき長城』河出書房新社　一九六八
⑰『孤立の憂愁のなかで』筑摩書房　一九六九
⑱『自立の思想』文和書房（対談を含む）一九七一
⑲『人間にとって』新潮社　一九七一
⑳『文学講座』河出書房新社　一九七六

このほかに、編著としては次の㉑および㉒、対談集として㉓などがある。

㉑『文学のすすめ』筑摩書房　一九六七
㉒『戦後文学の思想』筑摩書房　一九六八
㉓『生涯にわたる阿修羅として　高橋和巳対話集』徳間書店　一九七〇
㉔『自立の思想』文和書房　一九七一
㉕『暗黒への出発』徳間書店　一九七一

㉑は埴谷雄高、野間宏といった戦後作家から現代文学研究の第一線の批評家をそろえたアンソロジー文学入門書である。㉒は高橋和巳に大きな影響を与えた戦後文学を概観しながら、その本質を探究した。㉓は四本の講演録の他、15名もの論客との多方面にわたる対談を収録。㉔は没後に上梓され、晩年の八本の評論を収録。㉕は最後の評論集で、同じく没後に上梓され、インタビューを含む七本の講演を収録している。

こうした流れに沿ってみてみると、創作の両輪として全体知的な評論を展開したが、高橋和巳独自の文学論を集大成することなく急逝したことははなはだ残念なことであった。本稿では没後に刊行された『文学講座』における各章、および晩年に連載された『人間にとって』の各章を比較

参照しながら、彼の文学観に迫ってみたい。なお、刊行順は⑲、⑳だが、書かれた順にそって比較検証する。

4．『文学講座』（一九七六）にみる文学観

書名に「講座」と銘打っているのは、高橋和巳の立命館大学文学部講師時代（1962-1964）に読売テレビの企画で連続講座として構成されたことによる。デビュー作『悲の器』直後に執筆されたと思われることから、前掲⑭、⑮の系列に準ずる。[2]

構成は次のようになっている。個別の文学批評から全体を俯瞰する文学論の構築が見られる。

文学と運命、文学と自然、文学と宗教、文学と愛、文学と社会、文学と心理、ユートピア文学、文学と政治、現代日本文学の問題

文学と対峙する主題、即ち「運命」からはじまり、「自然」「宗教」「愛」「社会」「心理」「政治」にいたる序列は、高橋の文学観の特徴を示唆している。「運命」を起点として、周縁を包括、内包するという思想、哲学は、やはり彼の志向した中国文学研究、「葛藤的人間」に流れる哲学の原質であったといえよう。特徴的なことは、各章において、「文学とX」のように人間生活を取り巻く関数をあて、文学論を論じようとした野心的な試みである。であれば、「文学と哲学」、「文学と歴史」、「文学と芸術」、「文学と家庭」、など当然、念頭に置かれるべきものであったが、おそらく紙面と時間の都合で捨象されたものであろう。ちなみに最初に「運命」をもってきたのは高橋和巳の立ち位置を象徴している。次に「自然」は、やはりこれも中国文学論からの導きによるものであろう。一般的に文学を論じるとき、生活の中で、人間と人間の関係性の中で思考するのが自然であるように思われるが、この序列は高橋和巳の文学観の原点を示している。一方、文学論の構築にあたっては、前後をいれかえて、たとえば日常と文学、社会と文学、などのようにまず対象を先に置くのが常道のように思われる。最初に文学ありき、ではなく、現実の諸問題に立ち向かい、解決の努力をはらうべき文学を後に置くという方法論的思考である。だが、高橋はこれに抗するかのように、確固とした文学という「器」をまずおいて、そこに運命なり自然なりを配置しようとした点に注目してみたい。

これは、ある物事なり現象を議論する、ひとつの手法ではあろうが、一方でまた限界性もあるような気がする。たとえば、「政治と文学」ではまず対象とすべきカテゴリーを設定し、さらに内部のさまざまな政治の現場、個別的現象があり、そこに突起した現象に文学がどういう役割を演じるか、という思惟構成が求められる。一方、「文学と政治」では、文学において、政治がどう描かれたか、あるいは結果論的に描かれるべきかという思想的営為にに力点がおかれる。高橋がこうした論法をとった思念的背景には文学という思想的営為がまずあって、そこに世界が収斂していく。

その過程こそが文学の本質ととらえたからであろう。その意味では前者の方法論にくらべてむしろダイナミックな、動的な観察といえよう。

ここで、「と」の表す本質的な意味を今少し踏み入って考えてみたい。接続助詞「と」は二項の対象を結合するが、「AとB」という時「A」は一次的、原初的、起点的な情報で「B」が本来の議論する要目である。例えば「政治と文学」では、「政治に対する文学」の位置取り、本質を問うというものである。「と」は「における」と解される。「戦争と罪責」、「戦争とトラウマ」などのようにそれぞれ「戦争に見る、戦争における罪責、トラウマ」となり、「AのB」「BのA」とは視点を異にする。「AとB」は「Aと、そこにみられるB」という二重の意味がもとめられる。「の」を用いた「政治の文学」とも「文学の政治」とも言い得ない。一方、「文学と政治」となれば、「文学に見られる政治」となり、「政治と文学」とくらべて「文学」が上位にあり、その範疇下、概念下で政治を多面的に論ずることになる。高橋は過渡期の時代に、こうした思想的態度を固執した。

とりわけ、これらの初期評論において、高橋は後年の「自己否定」に連なる「自己純化」という姿勢を提示していることは重要である。遠からず体験するであろう、学園闘争の中で自らの立ち位置を予見したかのような省察であり、漱石の『私の個人主義』における「自己本位」の生成を意識したものであることは明白である。高橋はドストエフスキーの『悪霊』、魯迅の「文学と革命」、「狂人日記」をひきあいにして、次のように述べている。「文学それ自体の役割（＝責任）」をはたす意味を再確認しようとした姿勢がうかがわれる。

> ……簡単にいえば、およそつぎの時代をになおうとするものは、単に敵を倒すというような闘争の論理にしたがうだけでなくて、その闘いのさなかに自分自身を従来あった姿以上のものに純化し、高めていかなければならない。私はそれを〈自己浄化〉というふうな言葉で呼んでいますが、自分自身を清めるということがなされなければ、未来をたくすべき階層、あるいは未来をたくすべき青年たちと言うことが言えないわけです。（「文学と政治」。傍点、引用者。以下同様）

さらに、高橋はこの二項の序列について、独自の見解を追求しようとした。そしてその双方の検証により、結局はそこに介在する「人間」に注目するにいたったのである。だが、その「人間」の価値づけも相応の攪拌を生じざるを得ない。次にあげる「として」「にとって」にみる、対象、他者、自者という三者間の葛藤、相克である。

5. 文芸同人誌『人間として』（一九七〇―七二）の文学活動

筑摩書房から季刊文芸誌『人間として』が刊行されたのは一九七〇年三月であった。これまでの商業文芸誌とは異なり、志を同じくする同人に

よって討論を特集とし、創作、評論、エッセイなどを掲載した。若い作家の発掘にも努めた。冊子裏表紙には2号まで、創刊の「志」が記されている。「本誌」をあえて「本書」としたのは、一冊一冊が当該特集を担う使命感によるものであった。

> 時代はいま大きな転換を迫られている。問題を予感し先取りすべき文学に課せられた責務はまさに深く重い。本書は、あえてその課題を担う鋭い文学運動の拠点たらんとするものである。

同人は小田実、開高健、柴田翔、高橋和巳、真継伸彦であった。文学を「時代の転換期」にあって「問題を予感し先取りする」課題を突き付けた責務は初期評論『文学の責任』を敷衍したものであった。持続する〈志〉である。「問題を予感し先取りすべき文学」、「文学運動の拠点」といったテーゼは多様化した価値観の現代ではほぼ死語に近いものだが、同人の真摯な姿勢を物語っている。

高橋和巳は晩年いくたびかの体調の疾患を体験し、また学生運動学園闘争に対処した苦い体験から京都大学の職を辞したのを機に、あらたな表現活動に立ち向かおうとした決意表明のようでもあった。高橋は第5号までの討論、座談会で積極的な発言をおこなっている。6号以降の同人は4名になったが、実質は開高健を除く3名であった。[3] 問題関心の所在をみるために、創刊号から終刊号まで掲載された特集（討論）を一覧にしてみよう。

刊行日	特集・討論
創刊号 1970.03	表現と行為　討論：なぜ書くか――創刊の言葉にかえて
2号 1970.06	状況と人間　討論：混沌の中の創造　学生運動の思想的体験
3号 1970.09	言葉と想像力　討論：生きた言葉の獲得
4号 1970.12	討論：私が歩きだすところ　座談会：生き続けることと三島氏らの死
5号 1971.03	戦後文学を考える　討論：戦後文学が担うもの
6号 1971.06	高橋和巳を弔う特集号
7号 1971.09	ことばと現実
8号 1971.12	全体をとらえる方法　討論：現実と拮抗する方法を
9号 1972.03	いま問われていること

10号　1972.06　危機の状況の中で
11号　1972.09　差別と表現　討論：差別と表現をめぐって
12号　1972.12　現代を拓く文学―反省と展望―「人間として」を論ずる

同誌に掲載された高橋の著作では上記討論への参加のほか、以下のものがある。とくに「三度目の敗北」は自らの再生再起を意図した手記として、また過渡期における時代を先取りする想像力について問題提起を行った省察として注目されるが、逆にそのことの担うべき課題の重さが枷となっていたこともまた事実であった。

創刊号「白く塗りたる墓（第1部）」（長篇小説）「言論の自由について」（エッセイ）
第3号「三度目の敗北―闘病の記」（手記）
第5号「討論をおわって」（討論「私が歩き出すところ」の総括）
第6号「現代における想像力の問題」（評論）

6．『人間にとって』（一九七一）にみる文学志向

同人誌『人間として』によって、高橋和巳の人間主義がより前面に出されるようになったが、そもそも高橋和巳の評論、意識において、「人間」が登場するのは比較的早い時期である。とりわけ初期評論において「葛藤的人間の哲学」が意図したところは大きい。人間という存在は葛藤し、苦悩することでしか本性をあらわさない。埴谷雄高によって「苦悩教の始祖」と命名されたように、「苦悩する力」こそが自立化への最大の起爆剤となるべきであった。この点は「生命」論とも重なり、上掲㉕の評論・講演録「生命について」に引き継がれることになる。

『人間にとって』は一九六九年七・八月号から一九七一年一月号にかけて新潮社のPR誌『波』に連載されたもので、それぞれの主題「Xについて」という構成になっている。

自己否定について、宗教・平和・革命、裁判について、差別について、経験について、死について、国家について、わが体験

病後であり、さらに再発した病魔との闘いの中での手記的なもので、冒頭の二題は、学園闘争のなかで遭遇した沈痛な思いを綴ったものである。「経験」、「死」という前掲の『文学講座』にはなかった人間をとりまく宿命論的な対象をあつかっている。そしてもっとも特徴的なのは、『文学講座』が最初に「運命」を対象としたのに対して、ここでは「自己否定」が掲げられている点である。これは高橋の文学の行動性を示すもので、多くの社会性をもつ主題をテーマにしたことの顕現でもあった。「経験」は「社会」を意識し、「死」イコール「運命」という領域に注視したのは、重篤な病を背負ってようやく到達した境地でもあったが、最後に「国家」をもってきたところは、全体小説を志向した高橋らしい姿勢がみてとれる。最後の「わが体験」は彼の戦時中に体験した農村動員についての記憶回顧であるが、彼の脳裏に終始一貫して通底していた戦時体験が明らかにされていると言えよう。[4] これまでの著作活動を振り返りつつも、学生運動の体験と戦時体験とを交錯させるかのような、挫折からの蘇生、起死回生を期するものであった。その思いは帯に書かれた次のような文言にもうかがわれる。

人間にとって、宗教とは、革命とは、平和とは、国家とは、死とは、何か？　絶望の彼方より現われる曙光を追い求めながら、ついに果せぬまま死に至った苦闘の軌跡を収録する最後の著作。

なお、安田武との対談集『ふたたび人間を問う』（雄渾社、一九七五）にも「人間」を軸に据えた議論があるが、これについては補足後述する。

思想の根源を人間にもとめたのは、彼の中国文学研究の所産でもあるが、それは権力者に常に翻弄される民衆の悲哀でもあった。それは今日の現実をみても明らかであるように普遍的な現実である。高橋は世界の構図において中心に人間を据え、国家、革命、自己否定といった関数関係を思考した。なお、書名「人間にとって」とは別に各章は「について」を表題としていることにも注目したい。

この「にとって」は「として」と同じように動詞を用いた、言語学でいう後置詞の構成をとっているのだが、「として」が外発的に自立化への志向を期し、何をどうしようとしているのかを問うのに対し、「にとって」はその逆方向、つまり内発的に自己に向かうベクトルを示しているように思われる。「Xとは何か」が続き、より内省的な省察に向かう。「として」の資格、立場よりも、「にとって」はむしろその出発点となる存在そのものを問う。その根拠は、やはり人間論、生命論へのあくなき探求にほかならない。

「として」から「にとって」への転回（展開）、さらに「に対して」「について」という思考に連続する。

繰り返すように「として」は何をすべきか、を問い、そもそもの立ち向かう対象への対峙、そして対話をめざす。「にとって」は「として」と「にして」の中間に立脚した調和の思想であるが、その領域はもっぱら哲学的形而上的思索に陥ってしまう。高橋は「にとって」を深化させることによって、文学の再出発をはかったのである。そしてその問いは未完であり、現在もその意味の根源を突き付けられている。

現代では、古典的な、宗教、国家、民族といった主題に加えて環境、感染症、民族、ＩＴ、といった混濁した状況が浮上する。高橋和巳没後五十年にあたり、この最後の著作を出発点として、高橋文学の再検証の機会がおとずれようとしている。なお、のちに同書名の新潮文庫版（一九七九）から出された際には、三島由紀夫の自決に衝撃を受けて書かれた「自殺の形而上学」他33編が収められた。高橋和巳はデビュー作「悲の器」受賞後約十年に亙って全力疾走してきたが、挫折と絶望の中からあらためて再起する自己存在を問うたのであった。前年に発症した疾患を、いわば漱石の「修善寺の大患」と重ね合わせるかのように、思想的にも文学的にも再出発を期そうとしたのである。

7.『対話　ふたたび人間を問う』（一九六八）にみる人間の阿修羅

以上、『文学講座』、『人間にとって』を手掛かりとして、また、同人誌『人間として』も参考に、高橋和巳の人間論と文学観の相関を概観してきたが、さらに付け加えておきたいのが『対話　ふたたび人間を問う』である。一九六八年に刊行され、愛蔵版として没後一九七五年に再版された。十一歳年長の安田武は学徒出陣の体験者であり、『きけわだつみの声』の編纂にも協力した戦争体験者である。この対話の企画は高橋が立命館大学講師時代に構内にあった銅像の破壊などによって影響を受けたものと思われる。「わだつみ像」は一九五三年一二月八日に建立された。彫刻家本郷新の手になる。立命館の教学の理念は「平和と民主主義」である。一九六九年五月二十日、大学紛争の最中に全共闘学生によって破壊された。戦後の民主主義の虚妄と欺瞞性を問うたのである。また安田武は『戦争体験　一九七〇年への遺書』（未来社、一九六三）などの著書によっても知られるように、戦争の影響を色濃く受けた世代である。対話は次の四章から構成されている。

戦争にみる人間、文化にみる人間、文学にみる人間、日本人にとって文化とは何か

とりわけ「文学に見る人間」では、文学の型、小説の型を文学の領域と人間観察について述べ、戦後文学、戦後の戦争文学について、「人間は何において死ねるか」、「極限状況における人間」、「生きのこる人間とは」という提起を行っている。ここにも高橋の人間主義、人間観が強くうかがわれる。

8. 自立と再生――青春論にみる人間主義

生涯の師として仰いだ埴谷雄高から「苦悩教の始祖」と称されたように、高橋和巳の描く小説の主人公は、知識人の没落風景を身をもって演じているのだが、そこには孤立無援の思想を武器にして、ひとたびの挫折から立ちあがる姿を映し出している。それはまた青春の特権でもある。彼は「自立と挫折の青春像――わが青年論」というエッセイで次のように述べている。長くなるが、最後二段落を引用する。

繰返して言いたい。皆が肩をよせあって、こうだこうだ、といっている間は、それはまだ個別的な教養習得の過程にすぎない。個別的とはひとりひとり別という意味だが、皆が直接的に同一性を確かめあえる次元こそが、実はむしろ個別的なのである。普遍は次に段階にあらわれてくる。普遍もまた通常の意識とは逆に、ほとんど絶望的な孤独地獄の中に暗室にさしこむ一筋の光りのようにおとずれるものだ。それ以外にいかなる普遍性の獲得の方法もあり得ない。(中略)

時代にもっともあざむかれやすい青年、地域の特殊事情にもっとも制約されやすい青年こそが、逆にもっとも本質的であり得、もっとも世界的であり得る秘密はこのあたりにある。ひとときあざむかれ、ひととき制約され、ひととき挫折することを、それゆえに、恐れる必要は何もないのだ。

また、「教養」「個別」「普遍的」という概念も、それに達するには孤独な闘いのなかでしか自覚されない。高橋は「自立」とともに持続する「志向」という観念を最大限に主張した。上掲と重なる姿勢は、晩年に書かれた「自立化への志向」にも記されている。

ことを日本における思想運動の、じりじりと進化する自立化の過程として見れば、苦しい自己否定を重ねた青年たち、相手を斬ることで同時に自分を斬りきざんだ青年たちが、ひとたびの疲労と銷沈ののちに、ひとたびの絶望、その絶望をきわめつくす更なる絶望ののちに、新たな思想的営為者として再生してくることを願わずにはいられない。教師として言っているのではなく、一個の人間として。(傍点、引用者)

最後に呟く「一個の人間として」こそが、彼の拠ってたつ思想的根拠であった。「として」という立場を固持するところに、思想的営為が生まれる。晩年の「人間にとって」はその思想のさらなる高み、いうなれば漱石の「自己本位」を継承しようとしたものであった。

9．政治の季節の中で――「大いなる過渡期の思想」

こうして概観してみれば、高橋和巳は表層的な文学論だけにとどまらず、本格的な、日本人の近代意識までを遡行する文学論の構築にさしかかっていたことがわかる。およそ作家は作品を書き続けるだけで、その内実は文学評論の専門家にゆだねることになるのだが、彼はまさに両輪として「書く」ことの意味を問うたのである。その意味では、稀有な文学研究者であったといえよう。大江健三郎にしても三島由紀夫にしてもなしえなかった文学的営為であり、高橋和巳の文学論は書き残されたものからも際立っているように思われる。

おそらくその背景には、夏目漱石への畏敬と、彼を超えようとする文学論の構築への志向があったと思われる。高橋和巳は初期の評論として、夏目漱石に関する本格的な評論「夏目漱石における近代」、「知識人の苦悩・夏目漱石」を書いている。無数にある漱石論のなかで、あまたの漱石研究者のほかに、一作家が執筆した漱石論としては高く評価されるものである。他の作家論にしてもそうだが、これほどの緻密な検証をなした作家はほかにいない。

一九六九年十月、当時まだ京都大学助教授であった高橋和巳は生前に一度だけ三島由紀夫と対談を行っている。[5] 三島の自決一年前であるが、「大いなる過渡期の論理　行動する作家の思弁と責任」と題して、高橋は冒頭に大学教授への失望から言語表現全体への不信を赤裸々に述べている（翌月の月刊誌『潮』に掲載）。翌年一九七〇年三月に京都大学を辞職し、同時に同人誌『人間として』の創刊にいたる態度表明とも考えられるが、「論理」と「倫理」の相克から人間性の回復を志向したものであった。それぞれの時代には「過渡期」というにふさわしい現象が惹起するが、既成の価値観に対する言語表現のありかたを問うたのである。高橋和巳の心中には「視野脱落」を怖れ、「共感共苦」、「常在戦場」の意識があったことは明白である。そして底流するのは人間の「運命論」であった。

多くの論者は高橋和巳の文学史的な位置づけとして、団塊の世代、全共闘世代の圧倒的な支持を受けた、と記すだけで、彼の目指した文学の本質についての議論をあえて避けようとしているふしがある。ある作家を時代のメルクマールのごとき定位させるだけで、その目指した本質を直視しない態度こそ、高橋が忌み嫌った〈視野狭窄〉、〈視野脱落〉の陥穽であった。

没後五十年をむかえ、文学がブンガクとしてエンターテイメントの具になりさがり、商業化を迷走しつづけるなか、核の脅威、ウイルス、ＩＴといった新しい脅威との遭遇にどうたちむかうのか、そしてそこに人間性をどう探求していけばよいのか、が問われている。

晩年、彼は「「義」に近い人間関係を」というエッセイで、人間論を述べている。[6]「義」とは「義理人情」の「義」である、「義務」の「義」である。学生運動の中での絶望と希望を体験した彼の行き着いた先は、東洋的人間関係の回復であった。

こと大学に関していえば、大学の秩序、および社会や他の団体との関係の水準的成文化は、各大学がそれぞれの特質性の上に、いくらかなりとも〈義〉に近い、より新しい人間関係を築きえたのちでよいのである。各大学がそれを作り、文部省はその最大公約数的なものを抽出すればよいのだ。そしてそれを成すためには、気にくわぬ者は排除し、自分のすわっている椅子には他の者はすわらせぬという、一見非政治的にみえる大学の管理者層の精神をむしばんでいる悪しき政治主義を、大学は一刻も洗滌せねばならない。（傍点、引用者）

象牙の塔と称された大学は、いまや大衆化され、価値観も多様化が進んだが、知識人の予備軍を育成する場であることは今も昔もかわらない。ただ、否定する力は相応の変貌が生まれているように思われる。今、大学は一見自由な空気に覆われているように見えても、「健全な自治」、「研究、言論、表現の自由」は必ずしも保証されているというわけではなく、助成金の獲得を順調に維持し続けるために自己点検などさまざまな権力忖度の機会にみちている。授業評価ひとつとってみても、基準にそぐわないものは評価の対象からはずされるばかりか、ペナルティまで課せられかねない。理系大学では今後、産学協同の研究が推奨され、日本学術会議会員任命拒否問題にみられる、日本国憲法の保障する学問の自由などにも少なからず影響を及ぼすことも懸念されている。対話よりは闘争を強いられざるをえない「悪しき政治主義」は依然として蔓延っている。

おわりに――「飛翔」と「翼をください」

高橋和巳は多くの長篇小説のほかに数篇の短篇小説も書いている。そのなかの「飛翔」について附言しておきたい。これはいってみれば生命の誕生から繁栄、そして生きるために飛翔し、そしてあげくは死滅する、「生者必滅、「会者定離」の世界、無常観を描いたものである。「飛翔」には生命の生誕から終焉まで、周辺の情景と重ね合わせながら描写した、生命論として、高橋和巳の文学観を底流するものであった。[7] 例えば、次のようなくだり、鳥の跗蹠部にはめられた「アルミの枷」こそが、彼の描くべき運命の対象であった。

鳥はなぜ自分の跗蹠部にアルミの枷がはまっているのかを知らなかった。ある日ふと気づいてみると、自分の片足がわずかながら重くなっていたのだ。振っても振ってもはずれない以上、それは彼の運命であり、そして運命もまたいつしか日常と化す。だが今、全力をあげて風と闘わねばならぬ時、再びそれは重い運命となって甦ったのだ。

高橋和巳の死の四か月前、歌謡界に一曲がリリースされた。作詞山上路夫、作曲・編曲村井邦彦、「赤い鳥」がうたった「翼をください」であ

る。当時、大学二年生であった筆者は、この曲を仲間とともに失意の中で実に新鮮な気持ちで受け止めたことを思い起こす。「多様性と調和」をテーマにした東京五輪二〇二〇の開会式（2021.7.23）に、一斉に放たれる鳩とともに、この曲が流れたことは記憶に新しい。

今　私の願いごとが　叶うならば　翼がほしい
この背中に　鳥のように　白い翼　つけて下さい
この大空に　翼を広げ　飛んで行きたいよ
悲しみのない　自由な空へ　翼はためかせ　行きたい（リバティ、東芝音楽工業 1971.2.5）。

思えばこの楽曲は一たびの闘争に夢破れ傷ついた若者の内面の心情をうたったものとして、ある種の青春葬送曲のような抒情を引き起こしてもいた。期せずして同じくその年に「あの素晴らしい愛をもう一度」、「また逢う日まで」が巷に流れていたのも、その心情には絶望からの再生が込められていたように思う。[8]

行動する思想作家三島由紀夫の対極に位置したのが高橋和巳であった。高橋は三島が拠って立った昭和前期のナショナリズム、日本浪漫派の思想とその社会構造を全否定した。高橋は自ら二度の安保闘争を支援し、これに参加することで若い世代の知的偶像となった。この時期、また以後の数年、圧倒的な読者の支持を得た。高橋和巳は当時の若者たちにとって、清冽な知的教祖の存在であった。彼の吐き出す言葉、紡ぎ出す文章の中に、自分たちの生き方、進む道を見出そうとしたのである。文学という概念、志向性がもっとも鮮烈な時代であった。

本稿では高橋和巳の文学観を通して人間主義がどのような射程でとらえられているかをみてきた。もし病に斃れることがなければ彼の文学観から独自の文学論の構築がなされたであろう。没後五十年を経た今、文学の責任、方向性とは何か、あらためて問わずにいられない。

附記

本稿は二〇二一年八月二八日に中国・山東大学で開催された「第二回多文化研究と学際的教育」国際シンポジウムで発表した原稿を修訂したものである。発表の機会を与えてくださった山東大学外国語学院特任教授時衛国先生はじめ関係者各位に感謝申し上げる。

注

(1) 高橋和巳の年譜としてもっとも詳細なものは、『高橋和巳全集』第20巻収録のほかに川西政明『高橋和巳評伝』（講談社一九八一、のちに講談

社文芸文庫一九九五）が詳しい。

(2) 『文学講座』にはさらに数年後に同じく読売テレビの企画による講座内容が収録されているが、ここでは割愛する。

(3) 当時、こうした同人誌的文芸誌として『文学的立場』（小田切秀雄他編）があった。

(4) 高橋和巳の戦争観、戦争文学論については、田中（二〇一八）などを参照。

(5) 「大いなる過渡期の論理」と集約された対談では互いに胸襟をひらいた自由闊達な雰囲気がうかがわれ、随所に二人の思いが率直に語られている。なお、高橋和巳と三島由紀夫の心情的共振の一端については、藤村（二〇二二）を参照。

(6) 「「義」に近い人間関係を」は朝日新聞一九六九年五月九日夕刊に掲載され、のちに『孤立の憂愁の中で』（一九六九）におさめられた。

(7) 「飛翔」は当初『芸術生活』（芸術生活社一九六四年四月号）に発表、のちに『高橋和巳全集小説3』、『高橋和巳短編小説集』（阿部出版一九九一）などに収録された。作品論については、田中（二〇二二）を参照。

(8) 「翼をください」はフォークグループの赤い鳥が一九七一年二月五日に「竹田の子守唄」のB面曲として発表した。作詞山上路夫、作曲編曲村井邦彦である。もともとは一九七〇年に三重県志摩郡浜島町（現：志摩市）の「合歓の郷」で開かれたプロ作曲家コンテスト「合歓ポピュラーフェスティバル'70」のための曲として作られた。「また逢う日まで」は作詞阿久悠、作曲筒美京平、歌尾崎紀世彦で一九七一年三月五日にリリースされ、「あの素晴らしい愛をもう一度」は作詞北山修、作曲加藤和彦で一九七一年四月五日にリリースされた（以上、Wikipedia による）。

参考文献（本文中に言及した諸文献についてはこれを省略した）

田中寛「高橋和巳の戦争観と戦争文学論―『散華』、『堕落』を核として―」太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編『高橋和巳の文学と思想　――その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コールサック社　二〇一八年

田中寛「立命館大学講師時代の高橋和巳―中国語学と中国文学の講義担当を中心に」『大東文化大学紀要』第59号　二〇二一年三月

田中寛「高橋和巳「飛翔」論―内なる共感共苦の思想―」『新世紀人文学論究』第6号　新世紀人文学研究会　二〇二二年二月

夏目漱石「私の個人主義」『漱石全集』岩波書店　二〇一六年

藤村耕治「高橋和巳と三島由紀夫覚え書き」『新世紀人文学論究』第6号　新世紀人文学研究会　二〇二〇年二月

松原新一・磯田光一・秋山駿『増補改訂戦後日本文学史・年表』講談社　一九七九年

吉川幸次郎、埴谷雄高監修『高橋和巳全集』河出書房新社　一九七七―一九八〇